

令和 3 年 5 月 9 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02731

研究課題名(和文)『源氏物語』写本との比較から見た国宝『源氏物語絵巻』詞書の日本語学的研究

研究課題名(英文) A comparative study of Japanese Language in "The picture scrolls of the Tale of Genji" and the manuscripts of "Tale of Genji"

研究代表者

竹部 歩美 (Takebe, Ayumi)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：20457815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世に書写された国宝『源氏物語絵巻』詞書を含む『源氏物語』の諸写本に、平安時代以降の、中世の語彙語法が出現すること、あるいは、その可能性がある点が散見されることについて調査することを目的としたものである。本研究では、諸写本の本文を変体仮名漢字交じりで正確にテキスト化・データ化したうえで諸写本を比較し、中古語としては疑義の生ずる点が、誤字・脱字や字母の判読の誤りなど書写者の不注意により生じたものが、あるいは、当代の言語意識の反映であるのかを慎重に判断した。そのうえで、諸写本中に現れる、已然形+バによる仮定条件や係り結びの破格など、中世の語彙語法と考えられる諸現象について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『源氏物語』を平安時代の和文として読解しようとしたとき、そのテキストには青表紙本系統の、殊に、大島本を用いるのが一般的である。日本語学においても大島本をテキストとして調査研究を行うのが一般的であり、国宝『源氏物語絵巻』詞書を含む『源氏物語』諸写本を資料を考察対象とすることはまれであった。しかし、これら諸写本には、平安時代の語彙語法ではなく後代(中世)の言語意識の現れであるとも考え得るものがある。本研究は、国宝『源氏物語絵巻』詞書をはじめとする『源氏物語』諸写本を日本語史の資料として捉え直し、その言語現象の解明に取り組み直そうとした点で意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study considered in detail the appearance of Medieval Japanese grammar and vocabulary in "The Picture Scrolls of the Tale of Genji" and the manuscript of "The Tale of Genji". In this study, the text of the various manuscripts was accurately converted into text and data using a mixture of Hentai-gana and Kanji, and then the manuscripts were compared to determine carefully whether the problems were caused by carelessness on the part of the scribes, such as misspellings, omissions, or errors in reading the characters, or whether they were a reflection of the linguistic consciousness of the time period. After that, various phenomena of grammar, vocabulary, notation, and other aspects in Medieval Japanese were examined and discussed.

研究分野：日本語学

キーワード：源氏物語 源氏物語絵巻 古代日本語 文法 語彙 変体仮名 字母 日本語史

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 本研究以前の研究の動向：

『源氏物語』(以下、『物語』) 諸写本の本文は、『物語』本文の生成過程の解明や本文批判のための素材として用いられ、また、写本の系統(いわゆる青表紙本・河内本・別本)の判断のための根拠や諸写本間の親疎関係の特定の根拠として用いられてきてはいる。一方、日本語学の分野においては、『物語』は「大島本(あるいは青表紙本)」という平安時代和文であり、大島本という固定したテキストであるかのようにとらえ、これを考察対象として使用するのが一般的であり、大島本に代表される青表紙本系の『物語』写本以外の諸写本を言語資料として採用しようとはしてこなかった。国宝『源氏物語絵巻』の「詞書」(以下、「詞書」)にいたっては、これが『物語』からの抄出、つまり、『物語』全文ではないためか、言語資料として扱われること自体が非常に少なかった。「詞書」を含む『物語』の諸写本は、日本語学・日本語史の観点からは、仮名遣いや音便形・非音便形の異同に着目することなどはあったものの、複数の『物語』写本を言語資料として扱い、語彙語法面も含めてその言語の実態を総合的にとらえようという事は、積極的にはなされていなかった。また、『物語』諸写本に、中古語とは言えないもの、踏み込んで言えば、中世の言語意識が反映された、日本語史の資料である可能性について考えようとする事も、これまではなされてこなかった。

### (2) 本研究に至る経緯：

現存する『物語』は写本のみであり、平安時代末に作成された「詞書」が現存する最古の写本である。本研究代表者は、その、「詞書」の語彙語法の調査を行い、次の2つの報告を行っていた。

- ・ 国宝『源氏物語絵巻』詞書の仮名表記について 読解上の問題点と変体仮名の運用 (言語の研究(首都大学東京言語研究会)第1号、2015年)
- ・ 国宝『源氏物語絵巻』詞書の語法小考 『源氏物語』との比較から (国語研究(國學院大學国語研究会)第79号、2016年)

この調査から、「詞書」を平安時代和文として読解しようとしたとき、その語彙語法には疑義の生ずる点のあることが明らかとなった。そして、こうした点が生ずるに至った要因として、

「詞書」には明らかな誤字・脱字・衍字があることから、その、筆の逸れによって生じた可能性、詞書の書写者が当代の言語意識で書写しているため、依拠した『物語』本文(ただし依拠本は不明)の変体仮名を見誤った可能性、「詞書」が平安時代末期の書写であるため、書写者の当代の言語意識が反映した可能性、これらがあるものと推測するに至った。『物語』諸写本は、「詞書」を最古とし、その書写年代は鎌倉時代を遡ることがない。そこで、さらに同様の視点で『物語』諸写本を見たとき、「詞書」と同様、当代の言語意識が反映かと思われるところが『物語』諸写本にもあると言い得るようであることが判ってきた。しかし、既存の諸写本の活字化テキストは 現行の平仮名漢字交じり の状態にあるため、上の ~ について追及することができなかった。また、『源氏物語大成 校異篇』に示された異同は、音便形と非音便形、仮名遣いの相違、仮名と漢字の表記の相違は異同としては見なされない場合があり『大成』から写本の本文を正確に復元することが不可能であり、『別本集成』・『別本集成続』で活字化されている写本についても、実際に写本にあたり変体仮名の判読に揺れがある場合のあることが判ったため、改めて写本の本体にあたって本文を再確認する必要もあった。さらに、『大成』・『別本集成』・『別本集成続』で未翻刻の写本もあった。

## 2. 研究の目的

本研究は、中古(平安時代中期)の和文の標準的語法と標準的語法から外れる語法とが混在する国宝「詞書」ならびに、『物語』諸写本を比較しながら考察し、そこに現れる日本語の有り様と言語運用の実態を明らかにすることを目的とする。

(1) 「詞書」と『物語』諸写本とを変体仮名レベルで比較し、文字・単語・文・文章レベルでの異同を明らかにすることで、各写本の本文テキストの性質を把握する。

(2) 「詞書」と『物語』諸写本とが平安時代末期以後成立であることから、中古以降の日本語の出現する可能性が高いことを考慮し、上述の 1. 研究開始当初の背景 - (2) - ~ の可能性を追求しながら、その文字表記・仮名遣い・音韻・語彙・語法を記述する。

## 3. 研究の方法

(1) 「詞書」本文を 変体仮名と現行の平仮名漢字交じり 現行の平仮名仮名漢字交じり の状態に翻刻し正確なテキストを作成する。また、これに学校文法の10品詞での品詞の情報や変体仮名の字母の情報を付与したデータベースを作成する。『物語』諸写本(冊子として刊行され閲覧し得るもの・所蔵機関から閲覧許可の得られたもの・web上で閲覧し得るもの)についても同様の作業を行い、調査の対象となる文字や語の抽出や写本間の比較が容易になるようにする。

(2) (1)に基づき、「詞書」・『物語』諸写本における、中古和文の標準的語法の現れ と それ

以外の疑義の生ずる点 とを洗い出す。

(2) (1)(2)に基づき、変体仮名の運用・文字表記・語彙・語法などの観点から諸写本を比較し、「詞書」・『物語』諸写本の言語運用の実態の解明を試みる。

#### 4. 研究成果

(1) 「詞書」と『物語』諸写本の正確な本文テキストとデータベースの作成：

「詞書」本文を 変体仮名と現行の平仮名漢字交じり 現行の平仮名仮名漢字交じり の状態に翻刻した。また、現行の平仮名については、その字体が平仮名に近い場合には平仮名に、漢字に近い場合には漢字に活字化した。これによって、活字化した後も写本の元の表記の状態を把握することが可能となった。「詞書」に対応する『物語』書写本についても、同様の作業を行った。本文テキストの単語(学校文法での10品詞)に品詞の情報を付与したデータを作成した。これによって、「詞書」の文字表記(字母・漢字)と品詞の情報とが合体したデータを得ることとなり、語彙語法と文字表記、本文の異同と文字表記を関連付けて考察することが可能となった。

(2) 変体仮名・漢字の運用に関する考察：

『物語』写本の書写者には、変体仮名・漢字の運用に一定の規則性があり、各巻ごとに変体仮名の字母ごとの使用数を一覧にして比較すると、各字母の使用頻度の傾向は概ね一致すること、ただし、同一書写者であっても、その運用傾向が各巻によって異なる場合があることについて、研究成果として報告した。

『物語』写本の伝承書写者が同一であっても、筆跡が異なり、各字母の使用頻度の傾向が異なり、変体仮名・漢字の運用傾向も異なるものがあることについて、研究成果として報告した。

写本を変体仮名レベルで概観し、書写者の仮名・漢字の運用傾向を把握することにより、「平仮名相互間の混同」(中村義雄 1954「源氏物語絵巻の詞書について」『美術研究』174)を把握することが可能となった。つまり、書写者が依拠本の本文の変体仮名を見誤った可能性(すなわち、他本との異同が生じる要因の推測)と、依拠本の本文の文字表記を推測する(例えば、字母「无」はム・モ・ンを表し得るが、ある写本においてはそれをモの表記のために用いる傾向があるとき、その写本における「て无」の文字列は「テモ」意図していると判断できる。しかし他の写本では当該箇所には「てん・てむ」とあったとき、その書写者は依拠した写本の本文の「て无・てん」を見ていると推測するといった具合に)、その可能性を見出すに至った。この点についても研究成果として報告した。

(3) 語彙語法の調査：

伝西行筆の竹河を概観した結果、係り結びの破格、格助詞ノの主節主格用法、接頭語「御」を冠する形容詞など、語彙語法の史的変化に起因すると推測される、中世の語法が散見されたことについて、研究成果として報告した。

「詞書」には「ぬ(奴)」とも「ね(祢)」とも判読できる箇所がある。「詞書」の5種の書風での「ぬ」「ね」の字形の特徴、当該箇所の文字の運筆から、当該箇所の文字は「ね」であると断定できる。当該箇所以外の「詞書」の已然形+バは既実現の事態を表すのに対して当該箇所のみが未実現の事態を表すことから、当該箇所は「ねば」であり、室町時代以降に一般化するとされる已然形+バによる仮定条件表現の萌芽例であることが明らかとなった。このことを研究成果として報告した。

『物語』諸写本には、サ変動詞の使役・尊敬表現が「セ+サス(動詞+助動詞)」ではなく「サス」の一語で行われる場合がある。鎌倉期の写本と目される国冬本・穂久邇本に4例、室町期書写とされる諸写本に18例見られる。これらの「サス」は、明らかに使役・尊敬の意の文脈中に現れることから、中世の語法の現れ可能性がある。このことを研究成果として報告した。

助動詞「ムズ」は中古では会話文に現れる俗語であるが、用例は多くはなく、中世になると用例が増加し地の文での使用例も現れるとされる。助動詞「ムズ」は、『源氏物語大成校異篇』には3例見られるのに対し、『物語』諸写本では53箇所に現れる。53箇所のうち中世からとされる地の文での出現例は3箇所であり中世語法の現れと思しき一面がある。他の50箇所は会話文とそれに準ずる箇所に現れ、発話者や発話内容に卑俗な要素が見られる箇所に異同として現れる。このことを研究成果として報告した。

『物語』に見られる名詞「都(ミヤコ)」は都とそれ以外の2地点の対比に用いる傾向があり、「京(キヤウ)」は京を1地点として示す傾向があることについて研究成果として報告した。その中で、中古のキヤウは格助詞ヨリを下接し、ミヤコには格助詞ヨリが下接する例が皆無であるが、『物語』諸写本に現れるミヤコとキヤウの書写上の交代例を見ると、2地点の対比するミヤコに格助詞ヨリが下接する例があり、中世の散文資料中にもミヤコ+ヨリの用例があることから、次第にミヤコとキヤウの相違が意識されなくなっていった結果として生じた混同であると考え得ることについても言及した。

鎌倉期書写と目される『物語』書写本12本のうち、保坂本・穂久邇本に動詞オモフ(思フ)の主体敬語オモホスの用例が多く現れる。保坂本・陽明本・尾州家河内本のオモフの主体敬語の用例を概観すると、保坂本はオモホスの用例が他本より多く、鈴虫・夢浮橋に用例が集中する。オモフの主体敬語の待遇の高さはオボシメス>オモホス>オボス>オモヒタマフの順とされるが、保坂本のオモホスの待遇の度合いは、オボスを上回ることも同程度のこともあり、判

然としない。これは、オモホス>オボスであるという中古語を書写者が理解していなかった一方で、オモホスがオボスよりも古形と意識され古形であるために待遇価値が高いという意識もあったためだと推測した。これらのことについて、研究成果としてまとめ報告した。

本研究では、このように「詞書」・『物語』諸写本に中古以降の語彙語法が出現すること、あるいは、その可能性のある点が散見されることについて、諸現象を記述することによって言及した。

(4)本文の酷似について調査：

『物語』諸写本を扱い、本文の相違・異同に着目する過程で、保坂本と穂久邇本の横笛と鈴虫の本文がほぼ一致することが判った。この2本間には異同が非常に少ないこと、また、『源氏物語大成校異篇』本文と他の諸写本10本の横笛と鈴虫の本文と比較しても異同のある点が一致する写本はないが保坂本・穂久邇本と『大成』本文の異同箇所はほぼ一致すること、保坂本が補筆・見せ消ち・文字の消去と上書きなど加筆修正する以前の本文が、穂久邇本の本文と概ね一致することについて、研究成果として報告した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 竹部歩美	4. 巻 5
2. 論文標題 『源氏物語』諸写本に見られる助動詞ムズ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹部歩美	4. 巻 18-2
2. 論文標題 保坂本『源氏物語』と穂久邇本『源氏物語』の本文 酷似する横笛と鈴虫の本文について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹部歩美	4. 巻 4
2. 論文標題 国冬本『源氏物語』に見られる使役と尊敬のサス サ変動詞ス+サスに相当するサスについて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語の研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹部歩美	4. 巻 82
2. 論文標題 伝西行筆『源氏物語』竹河に見られる語法小考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語研究	6. 最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹部歩美	4. 巻 17-2
2. 論文標題 二つの伝西行筆『源氏物語』竹河の仮名表記	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 17-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 竹部歩美	4. 巻 3
2. 論文標題 源氏物語におけるミヤコとキャウの相違	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語の研究	6. 最初と最後の頁 23-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 竹部歩美	4. 巻 16-2
2. 論文標題 国冬本『源氏物語』の「柏木」と「鈴虫」の変体仮名の運用	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 竹部歩美	4. 巻 2
2. 論文標題 国宝『源氏物語絵巻』の御法の「詞書」に見られる「ねば」 已然形+バによる仮定条件表現	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 言語の研究	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------